

## 2025 年度 学部 A0 入試（人間科学部） 小論文問題

次の文章を読み、問いに答えなさい。

こども食堂が急増している。ちょっとしたブームと言ってよいだろう。

こども食堂のメリットは、なんといってもその「とっつきやすさ」にある。広がり続ける子どもの貧困に心を痛めている人は多い。「親の責任だ」と非難していれば子どもたちの状況が改善する、というわけでもない。少子化が進む中での貧困率増加は、日本の将来像にも影を落とす。教育は大事だが、勉強を教えられる自信はない。何かできないかと思うが、何をすればいいのかわからない。——そう思い悩む人たちに、こども食堂は格好のツールを提供した。

同時に忘れてならないのが「こども食堂」というネーミング。この簡潔なネーミングが、誰のために何をするかをこれ以上ない形で明確に表す。こども食堂の広がりには、このネーミングを抜きには語れない。

その名づけ親が、<sup>こんどうひろこ</sup>近藤博子さんだ。近藤さんが今、「こども食堂」ブームを歓迎しつつ、懸念も示す。それは「こども食堂は、こどもの食堂ではない」ということ。どういうことか。

近藤さんがもっとも懸念するのは「こども食堂というと、貧困家庭の子どもたちを集めて食事をさせるところと思われてしまう」こと。それが、広がりを生む半面で、反発も生んでしまった。いわく「貧困家庭の子ばかり集めるなんて、子どもがかわいそうじゃないか」「子どもの貧困は親の責任。他人が介入すべきではない」

違う、そうじゃない。もともとその定義が誤解を含んでいると近藤さんは言う。近藤さんの定義はこうだ。「こども食堂とは、子どもが一人でも安心して来られる無料または低額の食堂」。それだけ。「子ども」に貧困家庭という限定はついていない。「子どもだけ」とも言っていない。

大事なことは、子どもが一人ぼっちで食事しなければならない孤食を防ぎ、さまざまな人たちの多様な価値観に触れながら「だんらん」を提供することだ。だから、一人暮らし高齢者の食事会に子どもが来られるようになれば、それも「こども食堂」だ。子どものための、子ども専用食堂ではない。

「むしろ、より積極的に、多世代交流型になることが望ましい」と近藤さんは言う。孤食をわびしく感じるのは、子どもだけではない。若者もお年寄りも、仕事で疲れて食事をつくる元気の出ない母親や父親も「今日はちょっと食べに行こうかな」と寄ればいい。そして、子どもは食事後に遊んでもらったり、ちょっと勉強を見てもらったり、親は人生の先輩たちから子育てのアドバイスを受れたり、地域の子育て情報を交換したり、お年寄りは、子どもと遊んであげることを通じて子どもに遊んでもらえばいい。そこに障害のある子どもや大人がいてもいいし、外国籍の子どもや大人がいてもいい。より多くの人たちが「自分の居場所」と感じられるようになることが理想だ、と。

おそらくそれは、壁やドアで仕切られた特定の空間である必然性もないだろう。家の前の掃きそじをしていると、近所の人を通りかかって話し込むことになり、そこに下校途中の子どもたちが寄ってきて、そのお母さんたちも合流して、子どもたちが遊ぶ中で大人たちが立ち話しているような、そんな“場”。人々が交差するときに、ただすれ違うだけでなく、ちょっと<sup>とど</sup>留まることによって生まれる“場”が、近藤さんのイメージだ。

出典：湯浅 誠『「なんとかする」子どもの貧困』、角川新書、2017年。

出題のため一部改変。

問1 本文を要約しなさい。（100字以内）

問2 本文の内容についてあなたが思うところを述べなさい。（800字以内）

以上